おじさんズ通信

２０２２年１１月号（Ｎｏ２４）
発行元：登別市新生町４丁目緑風舎
発行者：おじさんズ３号
Web
http:www.ne.jp/asahi/takanet/mori/

2022 深秋・エト セトラ

1 「第三の男」をめぐる etc

a）このラストシーンなくして

つば広の帽子をかぶり、両手をロングコートのポケットに入れた長身の女性が、道の向こうから歩いてくる。ポツンと小さかったその姿が、チターの物憂げなトレモロの響きとともに次第に大きくなるが、車を背に彼女を待ち受ける男には目もくれず通り過ぎ、落ち葉舞う並木道のモノクロ画面から消え去った。

ご存じ（でない方もいるかも）キャロル・リード監督によるサスペンス映画の傑作「第三の男」のラストシーンです。撮られた場所は、ベートーベンやシューベルトが眠るウィーン中央墓地。あらすじや数々の名場面評はさておき、ある映画ファンはマロニエの並木道を背景にした約１分２０秒に及ぶ、まったくセリフなしのこのラストによって「第三の男」は映画史に残る名作になった、とも言っております。

そこで、こんなロケーション、市内や近郊にないものかと常々思案していたところ、ありました。西隣のさらに隣の、あのマチに。

b）海辺の駅への並木道

有珠山と昭和新山、そして噴火湾が一度に見渡せる駅として有名な JR 室蘭線の伊達市北舟岡駅。その駅前交差点から北東方向への国道３７号に至る、長さ１キロメートル弱の市道西萩原通り線がそれです。

幅６メートルの車道の両脇に並ぶ木は、残念ながら映画に出てくるセイヨウトチノキ（仏語マロニエ）ではなくイチョウでしたが、昭和５６年の道路整備に合わせて植えられたとか。その数１６４本。樹齢から推察すると、高さは軽く１０メートルは超えています。

そこで、このイチョウ並木道にジョセフ・コットン（ホリー・マーティンズ役）と女優役のアリダ・ヴァリを合成して、「北の湘南版・第三の男」ラストシーンを作ろうと、落ち葉の季節を狙い、撮影に出かけました。そして、出来たのが上の写真です。

似合いますね～。ここで撮影しても十分、耐えられる背景ではないですか、とか何とか自画自賛しながら、もう次の名画にピッタリ合う近郊ロケ・ハントを画策しております。

c）井上ひさしと「第三の男」

孤児院の図書室にある洋書をこっそり持ち出しては、古本屋に売って大好きな映画を見た（つまり窃盗の常習犯）という作家の井上ひさし氏。犯人が名乗りでるまで、図書室は封鎖と相成りました。

キネマ旬報にも映画の感想文を投稿していたという井上氏。高校３年生の時、「第三の男」の封切館と地元新聞共催によるコンクールに応募し、見事佳作に入賞。３か月間の入館無料パスを手に入れたまではよかったが、新聞に彼の文章が掲載された翌日、図書室のドア横に「井上君が犯人でした。彼は犯行のすべてを新聞に告白し…　院長」という紙が貼られていたとか。（「客席のわたしたちを圧倒する　井上ひさし」より）

「第三の男」が日本で公開されたのは昭和２７年。早速、管理委託されているキネ旬の山から、探してみると発見せり。B５判のモノクロ２ページに４つのシーンと、あらすじ（**＝写真＝**）などが掲載されていました。

ほかのグラビアページを開くと、「巴里のアメリカ人」や「欲望という名の電車」などの名作も紹介されています。井上氏は、ミュージカル映画「巴里のアメリカ人」を二十数回見たといい、自らの外国映画マイベスト１０の第８位に挙げています。この時代、洋画史上の特筆すべき黄金期といえるのかもしれません。

2 壮瞥町をめぐるetc

a）空白の２０年を埋める旅

日本各地でコンサート活動を続けるＴさん（川越市在住）のルーツ探しをお手伝いすべく１０月下旬、壮瞥町へ車を走らせた。おじいさんが４１歳だった大正１３年、壮瞥町の硫黄鉱山・黄渓幌別鉱業所で働いていたとのこと。それ以前の足跡だが２１歳の時、長崎に住んでいたことが判明している。さて、この間の２０年、ジイサマはどんなルートで北海道に渡ってきたのかを知りたい、という。

長崎で入手した戸籍謄本などを示し、役場の若い担当者にそれらしき書類は残っていないか、調べてもらったが、転籍届を出さない限り、それ以前の足取りなど確たる記録は残らないようで結果、収穫はゼロ…。あきらめきれず隣接する図書室でも史料を漁ったが、やはり手掛かりは得られずじまいでした。祖父の歩んだ道を追う、Ｔさんの旅は続きます。

b）そして、自身の記憶が噴火した

しかし壮瞥町への日帰り旅、まったくの無駄足ではありませんでした。昭和新山を望む新庁舎で「前の役場はどこでしたかね？」と聴いているうちに、「思い出した！」と、遠い記憶回路のスイッチが入りました。

昭和５２年８月７日午前９時12分、有珠山噴火ー。前夜から組合のキャンプで社員の大半は洞爺村にいましたが、噴煙とともに「Ｄ紙が号外を出すらしい」との情報も噴き出しました。当然、地元紙の意地めいた狼煙もモクモク上がり「それ、取材だ」。

「お前は壮瞥町役場に入れ」の指示を受け、他の面々も地鳴響く洞爺湖畔へ散開。整理部員は室蘭の本社に戻り、号外発行の準備に取り掛かりました。

思い返すほど、なんとも得難い体験でした。北大のＫ教授が役場前の庭でモクモクあがる噴煙を指さして「もう、あれは３千メートルに達しているでしょう」などと余裕の解説をしていましたが、ほどなくして、火山灰が降り始め建物の周りは真っ暗になりました。（ひょっとして、このまま灰に埋もれて、『ソウベツに死す』か？）など、一瞬ポンペイを想像しましたが、３時間ほどで降灰はやみ、ひと安心。

そんな思い出を語ると、図書室の男性職員と、司書の女性は「はあ～」と、どう相槌を打っていいのか思案投げ首の様子。そりゃそうです。４３年前の出来事、自分自身がとっくに忘れていたのだから。結局、Ｄ紙は期待に反して（？）号外を出さなかったことも、思い出してしまいました。

3 近郊ドライブのetc

a）青い服着た機関車はどこへ

札幌―網走間を走った特急オホーツクがタイに輸出され、観光列車に再生されるとの記事が載っていました。あれも、ここから船積みされたのだろうか、と推測する場所が室蘭港崎守ふ頭です。伊達の並木道撮影へ行く途中、目に入ったのが青い車体の連結された機関車。鉄っちゃんではないので、これをブルトレと呼ぶのか、分かりませんが、ここに４両、別な場所に５両置かれていました。

以前、某商業団体が客車の買い取りを計画。誘われてここで一緒に見学しましたが、資金のめどが立たず断念しました。円安の風が吹く限り、高値の華か。

b）渡りの飛行曲線に感動

こちらも崎守ふ頭から伊達に向かう湾岸道路沿いでのひとコマ。バードウオッチングのグループが、ヒヨドリの渡りを見守っていましたが、「あれ、戻ってきちゃった」と、どなたか声をあげました。群れが目指すは中継地点の絵鞆半島か、対岸の森か。しかし、ハヤブサなど、虎視眈々と待ち受ける猛禽類を察知し、引き返してきたとか。

それにしても、何羽いるのか数えきれないヒヨドリの大群が、流麗かつ瞬きする間もなく変化する、芸術的な曲線を描き群れ飛ぶ光景は感動ものでした。

薫風　烈風

▶新聞の整理理部記者経験はないのですが、先日、紙面編集で禁じ手とされていた「ハラキリ」を幾度か見ました。記事面の段罫線を端から端まで一直線に引くのはダメと覚えていたのですが、現役記者に聞くと最近はOKなのだとか。さすがに「この記事、上の段のどちらの記事から流れてきたのか？」と読み手を惑わす「泣き別れ」は、今も禁止ルールのままとか。

見出しも幾つかの教えがありますが、その一つがすべて漢字で埋めるのはご法度。必ず助詞などを入れる工夫が必要ですが、このall漢字見出しを墓に掘られた文字列（ひら仮名がない）になぞらえて「お墓見出し」と呼ぶとは知りませんでした。ＴＶで新聞部の高校生から学びました。「我以外、皆師」ですが、おっと、これも禁じ手臭い。それでは皆さん、お元気で～。